



みみん

【題字】谷川俊太郎さん



せんだい・みやぎNPOセンターニュースレター“みんみん”は、あらゆる組織が社会課題解決をキーワードに出会うきっかけづくりと、活動を発信をすることから、新しい風を起こしていきたいと願っています。

目次

P 2	...
P 3	...
P 4	5
P 6	...
P 7	...
P 8	...

『クロスセクター』東北大学西出ゼミ 協働の強化書2「プロジェクト
住友商事インターンシッププログラム修了報告
せんだい・みやぎNPOセンター事業報告
みやぎ連携復興センター「震災復興における支援アプローチ調査事業」中間報告
『ライブラリレー』東北HIVコミュニケーションシヨンス
新規会員・継続会員、編集後記、お知らせ、連絡先等



MY FAVORITE お気に入り小物拝見

住友商事インターン生の寺田ゆかりさんと大津賢哉さん。お気に入りの小物は、それぞれ手帳とギターのピックです。「手帳には、9カ月間のインターンの予定が書かれており、見かえすと思いがよみがえります」と寺田さん。「趣味でバンド活動をしており、ギターを演奏しています。めずらしいものではありませんが、お気に入りで一番よく使っています」と大津さんが話してくださいました。

これからの地域形成に不可欠な存在といわれる、
NPO、企業、行政、大学等の各セクター（部門）が考える地域づくりとは？
地域づくりプロジェクトのご紹介や、取り組みをしている方にお話を伺います。

今回は

協働の強化書2013プロジェクト

震災後の「協働」の知見の蓄積に向けた、NPOと大学との協働

■「協働の強化書」のその後を調査

2007年度に発行された「協働の強化書」（「協働の強化書」研究会編、せんだい・みやぎNPOセンター発行）をご存知でしょうか。発行当時、仙台では行政とNPOの協働が進みつつある一方で、「行政・NPO どちらも協働をよく理解していない」「お互いのコミュニケーションが不足している」という課題も見え始めました。これらの課題を受けて、29人の市民・行政職員が参加する「協働の強化書」研究会が発足。せんだい・みやぎNPOセンターが事務局を担い、12回に及ぶ研究例会の開催と、協働事業を行っているNPOと自治体へ協働に関するアンケート調査を実施

し、協働についての全体像を解説する概論と17の協働事例を紹介する「協働の強化書」を発行しました。

その発行から5年以上が経過し、さらには東日本大震災を経て、宮城県内では、より多様な協働が生まれ、新たな課題も見えてきています。このような背景を受けて、現在の協働について調査を行っているのが「協働の強化書2013 プロジェクト」です。プロジェクトは、当センターと東北大学大学院経済学研究科非営利組織論ゼミナール（西出ゼミ）が協働で月1回の情報共有と協働事例の現地調査（ヒアリング）を行っています。

■「考えるテーブル 支援のかたち」で成果を報告

2013年12月11日には、せんだいメディアテーク6fギャラリー4200にて、県内16の市町での震災後の行政とNPOの協働について、「被災地でのパートナーシップ」と題した調査報告を行いました。この報告は、せんだいメディアテークと仙台市市民活動サポートセンターの協働事業である「考えるテーブル 支援のかたち」の一環として行われ、当日は西出ゼミの学生の他、復興支援に取り組むNPO、行政職員など多彩な方が参加しました。

西出ゼミの中尾公一さんから、震災後に協働が生まれた背景や、委託事業など資金の投入を伴う協働事例の課題などについて調査報告を行った後、参加者が少人数のグループに分かれて考える時間を持ちました。用意された問いは「行政とNPOはそれぞれ何を考え、行動をしていけば、よりよい被災者支援ができるのでしょうか」「災害時に、行政とNPOに加え、住民はどのような役割を果たしていけるのでしょうか」の二つ。どのグループ

からも出ていたのは、協働を始めるにも進めるにも、お互いのコミュニケーションが大切だということ。お互いに何をどこまでできるのか、何が必要なのかを伝え、報告を行うことで初めて協働が成り立つという意見です。

また、「住民はどのような役割を果たしていけるのでしょうか」との問いかけがあったことで、参加者のみなさんは、それぞれ自分の立場で果たせる役割について考えるきっかけになったようです。

今回の「考えるテーブル 支援のかたち」は、行政施設、NPO、大学と多様な機関による協働で実施されました。行政にとっては、学生の率直な意見を直接聞ける場となり、また学生にとっては、行政職員や復興に関わる現場の人の声を聞く機会にもなり、双方にとって得るものが大きかったようです。

■「協働の強化書2013」は春に発行予定

協働の強化書2013プロジェクトの調査報告、宮城県内の様々な協働事例をまとめた「協働の強化書2013」は今春（6月頃までに）、ウェブ上での発行（PDFファイル）を予定しています。いましばらく、お待ちください。

住友商事インターンシッププログラム修了報告

今年度は、宮城県内6団体で、7月～3月に実践型インターンシップに取り組みました。ここでは、当センターに所属した2名からお話を伺います。

■寺田ゆかりさん

(東北大学 文学部 3年)

活動を通して、非常にたくさんの気づきがありました。特に、いつまでに何をしておかなければならないのかを考えた上で、その時にすべきことを確実に積み重ねていくことの大切さです。資料の取りまとめや企画の運営をしていくなかで、この先を見越した準備の重要性を実感しました。今後も、是非意識していきたいです。

また、自ら企画したインターン受け入れ団体訪問では、NPO団体の活動や、そこでの学生の取り組みから、多くの人々の支えがあって仙台という地域があるのだということを感じました。訪問先で見たことや考えたことをわかりやすく紹介するため、文章や写真を工夫してブログの記事に書くように意識しました。記事への反応が返ってきた時にはとても嬉しく、企画して良かったと思えました。

この9ヶ月のインターンの仲間や団体の方々と関わりの中で、今まで知らなかったことや新たな考え方に触れることができ、一つひとつの経験が新鮮でした。活動期間は終了ですが、これから何らかの形で、仙台という地域やNPOの活動に関わっていきたいです。

■大津賢哉さん

(宮城教育大学 教育学部 2年)

私は、活動を終えて主に2つのことを学ぶことができました。1つ目はビジネスマナーについてです。この活動では大人の方と多く接する機会があり、その中でメールの送り方や言葉の使い方などについて学ぶことが出来ました。2つ目は計画段階において先を見通すことの大切さです。何かを企画する際に、それには何が必要で、いつまでに何をすべきかなど、計画が非常に大切と言われる理由を、身をもって実感することが出来ました。私にとって普段の大学生では味わえない、非常に大切な期間になりました。これもメンターの小川さんや同じくインターン生の寺田さんやその他多くの方々のご協力があったことです。9か月間、本当にありがとうございました。

活動月表

月	活動内容
7月	・活動開始、年間計画作成
8月	・インターン活動ブログ開設 ・第1回インターン交流会開催
9月	・団体訪問 ①杜の伝言板ゆるる ②ぶれいん・ゆに〜くす
10月	・第2回インターン交流会開催 ・団体訪問 ③冒険遊び場―せんだい・みやぎネットワーク ・活動3ヶ月振り返りミーティング
11月	・ 中間報告会 ・団体訪問 ④アスイク
12月	・活動6ヶ月振り返りミーティング
1月	・団体訪問 ⑤都市デザインワークス
2月	・石巻訪問ツアー(にじいろクレヨン他) ・団体訪問 ⑥Switch
3月	・ 修了報告会

※5月にプログラム報告冊子が完成予定。

■総評

この9ヶ月間、基本的な活動内容として報告会の実施と報告書の作成、全インターンの月報とりまとめを行って頂いたほかに、自発的な活動として寺田さんは受入れ団体取材、大津さんはスタディツアー実施に取り組みました。

学業やボランティア、クラブ活動に加えてのこのインターンシップと、限られた時間のなかで精一杯、最大限の活動を行ってくれた2人は、いろいろと苦労した分だけ大きな「やりがい」と「成長」を実感していることと思います。

これからの日本を背負う人材として、ここでの学びや気づきを糧に、社会に対して「正當にモノが伝えられる人」になってくれるものと期待しています。

インターンは卒業しても、縦横のつながりは終わるものではありません。3期生へのアドバイスなど、引き続きよろしくお願いしますね!

(せんだい・みやぎNPOセンター 小川真美)

フラスコイノベーション スクール活動報告

10月に開講しました、本年度のフラスコイノベーションスクール、大詰めを迎えております。10月より、それぞれの「志」や「思い」を、地元の講師陣の講義およびアドバイスをもとに事業構想を策定して参りました。その成果を、昨年12月19日に実施しました中間報告会で発表し、現在ブラッシュアップしているところです。その間、各種創業助成制度が開始され、受講者は積極的に申し込みを行っております。昨年度仙台市事業として実施したスクールの受講生も含め、12名の方が採択されました。また、助成制度を使わずに、開業したメンバーもいます。

これまで行った講座は以下の通りです。

■オープニング講座

「社会起業家への道～社会を変えるを仕事に～」
ゲスト／宮城治男氏 (NPO法人ETIC.)

■第1回講義

- 1)「ソーシャルビジネスによる復興支援、社会改革」
風見正三氏
(スクール総合プロデューサー、当センター理事、宮城大学教授)
- 2)「コミュニティビジネス・ソーシャルビジネスの実践」
佐々木秀之氏 (せんだい・みやぎNPOセンター)

■第2回講義

- 1)「ソーシャルキャピタル～つながりの役割～」
西出優子氏 (当センター理事、東北大学准教授)
- 2)「市民活動と音楽」
菊地竜生氏 (せんだい・みやぎNPOセンター)

■第3回講義

- 1)「ソーシャルビジネスでの被災地復興」
後藤心平氏
(一般社団法人メディア・コミュニケーション教育振興協会)
- 2)「持続可能な社会づくりを担う事業型環境NPO・社会的企業の支援事例」
鈴木美紀子氏 (EPO東北)

■第4回講義

・中間セミナー

■第5回講義

・起業家マインドに触れる
ゲスト、矢島里佳氏 (株式会社和える)

■第5回講義

・被災地に学ぶソーシャルビジネスツアーin陸前高田
ゲスト／河野通洋氏 (株式会社八木澤商店)

■第6回講義

・クラウドファンディングの実践
西村勇哉氏 (NPO法人ミラツク)
(大町事務局 佐々木秀之)

宮城労福協文化セミナー2014 「企業の資源を地域に活かす社会貢献活動」

2月5日(水)せんだい・みやぎNPOセンターと宮城県労働者福祉協議会が共催で、企業とNPOがつながり、それぞれの資源(人、モノ、スキル)を活かす社会貢献をテーマに開催しました。最初に当センター、伊藤事務局長によりNPOの活動について講座、続いて東北大学大学院准教授である高浦康有先生の基調講演、後半では昨年、このセミナーがきっかけで活動が広がった団体を招いてパネルディスカッションを行いました。

■NPOとは？

当センター伊藤事務局長がNPOの活動と企業との違いを説明し、市民活動の意味やNPOの立ち上げの事例を交えて伝えました。参加者からはNPOがどんな団体なのか？NPOの役割、仕組みが理解できたと感想がありました。

■「企業とNPOの連携」について

NPOと企業の協働を研究する東北大学大学院経済学研究科准教授である高浦康有先生の基調講演では、東日本大震災後の企業とNPOの協働の事例を種別ごと解説。①NPOへの物的・金銭的、ボランティア派遣などのチャリティ型、②企業とNPOが経営資源を交換し合う利害の一致点において協力するトランザクション型、③互いの経営資源を提供しながら価値観を共有し社会問題の解決に寄与できるインテグレーション型の4つのパターンです。後者になるほど深くかかわる関係に移行しパートナーシップの段階になっていきます。理想的な協働は企業もNPOも共通する価値観を追求し共に、結果を得るWIN-WINの関係であると話していました。参加者からは企業の社会的責任の発揮と、NPOとの連携の意義を確認できたとの声を頂きました。

■「企業の資源を活かした復興と社会貢献」

後半には高浦先生をコーディネーターに、山元町共同作業所「工房地球村」施設長田口ひろみさん、一般社団法人「WATALIS」代表理事である引地恵さんを迎えてのパネルディスカッションを行いました。田口さんから山元町の特産品「いちご」を使ったプロジェクトについて、また引地さんからは企業との協働で広がった販路でブランド化をめざす活動などの話を伺うことができました。

参加者からは「企業とNPOが協働で行う社会貢献の重要性、連携する事の大切さが分かったと感想がありました。せんだい・みやぎNPOセンターでは、企業やNPOが持つ資源を活かした連携が出来るよう、こうしたセミナーや働きかけを行っていきます。

(大町事務局 三浦圭一)

〈研修報告〉

市民と職員が元気になる 「協働」のかたち

せんだい・みやぎNPOセンターでは、行政職員向けの協働研修を行っています。昨年度も岩沼市で研修を行いました。今回は更にステップアップ版を1月20日(土)に実施しました。

■実施概要

今回の研修では協働を進めるポイントを学び、ワークショップを通し、様々な立場で地域課題を解決する術を考え、それぞれ発表する場となりました。午前の部は事務局次長の小川、午後の部は事務局長の伊藤が講師になり、それぞれ3時間ずつ、各20名の職員の皆さんに対し実施しました。

■協働を進めるポイント

前半は、協働を進める際のルールとして、①対等性・自主性の尊重、②相互理解、③目的・目標の共有、④役割分担・責任の明確化、⑤透明性の確保・情報公開があり、協働相手との関係においては、①から④までを、事業の全体に渡っては⑤の情報公開を念頭におき進めることを確認しました。

職員の方々は、楽しく協働を進めるポイントとして、協働は目的ではなく手段であり、関わりあう様々な人々が学び合う姿勢と信じる心等、注意すべきことも学ぶ機会となりました。

■協働の意味を体感

後半は協働について考えるワークショップを行いました。地域の中で良く起こり得る課題をグループごとに1つ選び、グループ内で配役を決め、課題が解決された状況を想定して知恵を出し合いました。町内会長、ボランティア団体代表、行政職員等、地域に生活している様々な立場になって、それぞれの思いを体感していました。

参加者からは、「グループワークを通じて、協働の役割、相手方は広い視点で求めることが良いと感じた」、「共通課題の存在を含め、協働に適した事業の取り組みであるのか否かを前提に、しっかり検討することが重要であると感じた。」等、行政職員として必要な視点を考える機会になっていました。今後も岩沼市の協働のパートナーとなりうるNPOとの交流や意見交換の場づくりなどを行いながら、更に協働が活発に行われる地域になれるように当センターもご協力していきます。

(大町事務局 遠藤孝志)

結論と行動を促進する会議運営

1月26日(日)、仙台市市民文化事業団主催で国際音楽コンクールのボランティアの方を対象とした研修をさせていただきました。

「結論と行動を促進する会議運営」というテーマで、会議に参加する人が感じる悩みを出しながら、実のある会議の運営と楽しく参加できる会議にできるのかをワークショップを通して学び合いました。

■これまで経験した嫌な会議、良い会議とはどんなもの？

なかなか意見がでない、結論が出ない、時間が長い、目的が示されていない、、、など会議の悩みがあります。まずは参加者でこれまで経験した嫌な会議とはどういう会議かを出し合ってもらいました。

意見が出にくい、批判的な意見が多い、時間がながく、決定できない、などなど。参加者みなさんがそれぞれ意見を聞きながら共感しあう嫌な会議。それをどうしたら参加していて気持ちのいい、楽しい会議になるのかを参加者側と進める側とのポイントをそれぞれ伝えました。

■準備8割・当日2割

会議に必要な役割分担を決める、事前の議題提案や関連する資料づくり、参加者への連絡、会議にふさわしい場づくりなど準備を整えることが重要です。同時に会議の目的は何なのかを明確にすること。アイデア創出、共有、意思決定するのかなど、参加者へ周知しておくことが大切で目的によって会議の技法も違うのです。

■会議をしてみよう

グループごとにテーマを選び、その会議で検討したいことを明確にしポイントを活かして実践してみました。グループ内で役割分担をし、会議に便利なツールを使いながら、それぞれ意見を出しあっていました。

参加者の感想は、視点を考えることができた、手法や小業を使うことで会議の良さが見いだされた、他の意見を引き出すことでお互いの連鎖反応が起き、良いアイデアが生まれることに気付いたなど、いつもの会議をもっと楽しく変えられるヒントが得られたようです。

(大町事務局 伊藤浩子)

「震災復興における支援アプローチ調査事業」中間報告

本調査ではみやぎ連携復興センター、いわて連携復興センター、ふくしま連携復興センターとJICA東北及び東北大学災害科学国際研究所が連携し、行政・住民・支援者といった復興関係者が日々現場で積み上げている復興まちづくりの取り組みについて事例収集を行っています。現場で活動する団体をはじめ、今後の災害復興現場での活動及び復興支援のあり方にかかる示唆を世界と共有していくことにつなげていきます。

■顕在化した地域課題と複雑化する復興課題

震災から丸3年という月日が経過していく中で、東日本大震災における復興まちづくりは、少子高齢化や過疎化という課題を抱えながら、新しい地域発展のあり方が模索されていた東北地域で発生したため、「持続可能な地域開発実現の長期的視野」と、「災害からの早期回復による混乱収拾の短期的視野」との相反する二つのニーズに挟まれることになっています。この結果、被災範囲が広いことに加え多様な地域特性もあって、復興まちづくりのプロセスが一律でなく複雑になっています。

■住民自治の再形成をサポート

被災地ではこうした課題に取り組む住民組織が立ち上がり、集団移転などの行政による復興事業の合意形成や、復興応援隊やNPO・専門家などの支援者、企業と連携した地域独自の復興まちづくりの活動・事業形成に取り組んでいる事例も見られます。そうした多様な住民自治の再形成を、今後は災害公営住宅などの集団移転地や、残された移転跡地で中長期的に支えていけるかが課題となります。みやぎ連携復興センターでは、住民自治の再形成サポート支援、仕組みづくりとともに多様な住民自治の事例を発信していきたいと思います。

(みやぎ連携復興センター 吉田祐也)

Beny's Note

代表理事 紅邑晶子

市民社会のつながりが、 困難を乗り越える力になる。

せんだいCARESというまちづくりのキャンペーンを10年近く行ってきました。今年の1月で発展的に終了ということになりましたが、このキャンペーンはわたしの自慢です。

市民活動団体の情報を企業から協賛金をいただいたり、パンフレットを見せの店頭で配布していただいたり、仙台市にはイベント会場を提供していただいたり、仙台市のほとんどの公共施設にパンフレットを配下していただいたり。文字通り官民協働によるキャンペーンでした。そのキャッチフレーズとしてここ数年掲げてきたのが「つながることがまちのチカラになる。」でした。震災後、この言葉はまさに被災地を表現している言葉ではないかと、改めて実感しました。

あれからまもなく3年目になります。いまだ、多くの人々がふるさとに戻れず、我が家も仮住まいのままです。一方で、東京でも大阪でも、被災地のことなどどこか遠い国の出来事のような選挙があったり、行われようとしています。

3月5日(水)に行われる災害復興支援フォーラムのキャッチフレーズは【被災地の回復力を高める支援～市民社会のつながりが、

困難を乗り越える力になる～】です。この企画は震災後からお付き合いのある公益財団法人プラン・ジャパンより提案をいただきました。キーワードは、【ソーシャル・キャピタル(市民力)】と【レジリエンス(回復力)】です。基調講演をされるダニエル・アルドリッチ教授は、ご自身がニューオーリンズでハリケーン・カトリナによる被災者であり、阪神淡路大震災や員岡津波の調査を行っており、そのなかで2つのキーワードが復興のために関係していると話されているそうです。地域を支える市民としての自覚、一人ひとりが市民としての権利と義務を果たすことが、地域の課題を乗り越える力になると思います。そんな話を皆さんと一緒にしたい3月5日です。

日 時: 3月5日(水) 13時～16時15分

会 場: 仙台市市民活動サポートセンター
市民活動シアター

参加費: 無料

申し込み/問合せ先:

公益財団法人プラン・ジャパン

電 話: 03-5481-0030

e-mail: event@plan-japan.org

活動やニーズ、「志」でつながろう。

ライブラリ

毎号「みやぎNPO情報ライブラリ」
登録団体の中から、ひとつをご紹介します。

今回は 東北HIVコミュニケーションズ

<https://fields.canpan.info/organization/detail/1164828335>

代表の小浜 耕治さんにお話を伺いました。

活動内容

1993年12月に設立し、HIV/AIDSによって自らの生命や生き方に影響を受けた人々が、共に生きる社会を作り出すことを目的に、「自分が自分である」ということを、共に考える場づくりを一貫して行ってきました。1991年にエイズメモリアルキルト(註:エイズと共に生き亡くなった方の生き様を表した布)仙台展を開催したメンバーが、翌年からキルティングビー(註:キルトを作成しながらエイズについて語る会)を定期的に開催しました。その参加者らで東北初の民間エイズ電話相談となる36時間エイズ電話相談を

開催し、95件に上る相談を受けたことによって、相談終了後に継続的な支援体制の必要性が議論され、東北HIVコミュニケーションズが設立されました。



■多様性を認めた、継続性のある支えあう自立

自立というのは、決して自分だけで立つのではなく、たくさんの支え棒を伴って立つという考えを大切にしています。自立する際は、自己決定を前提として、自分に必要なものを引き寄せていくことが必要です。支え棒も、お互いが居なくなったら困るような「相互依存」の支え方ではなく、あなたと私は違うのだという多様性を認めた上で、お互いを尊重する関係づくりが必要です。取り換えの利く、支え棒になるというのが理想で、そのような継続性のある支えあう体制が潤沢にある社会づくりを行っていきたいです。

読者のみなさんへのメッセージ

さまざまなテーマでの活動されている方がいると思いますが、上記の理念に共感していただける団体・個人の方がいらっしゃれば、ぜひ支えあう活動を一緒にしましょう。

現在の活動での、注目ポイント

■支えあう学習会

現在は、HIV/AIDS電話相談に加え、「相手との違いを認め、受益者・支援者という枠を超えてつながり、支えあう」という理念を共有し、自殺対策や性暴力に関する支援活動団体と共に、さまざまな切り口から、人権や支援体制などの勉強会を行っています。昨今は、市民の生活や価値観が多様化しており、「困り事」を抱えた場合は、ひとつのテーマで収まらない場合が数多くあります。勉強会は、時事的な話題を盛り込みつつ、HIV、セクシャリティ、性的自立等をテーマに行っています。参加者は、セクシャリティに関する学びの場が圧倒的に少ないので、それに関心のある方が多いのが特徴です。色々な立場の人がクロスオーバーできるような場にしたいと思っています。

■みやぎNPO情報ライブラリとは

「NPO情報ライブラリ」は、NPO・市民活動団体の皆さんから活動に関する情報をお預かりして、地域の市民・企業など社会一般に広く公開・発信する情報発信支援事業です。

お問い合わせは

東北HIVコミュニケーションズ
(THC)事務局

電話/FAX:
022-298-8532

次号の団体は

代表 小浜さんよりご紹介

「特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク」
～一人ひとりが自分らしく未来を切り拓く～ をコンセプトに、子どもと大人の「自分づくり(キャリア教育)」のため様々な『まなびのたねまき』を行っています。

(大町事務局 高尾詩乃)

サポート・ご協力 ありがとうございます

■平成25年度会員(敬称略・順不同、2013年12月1日～1月31日)

(正会員)風見正三、紅邑晶子 (準会員)布田剛、男女共同参画センター横浜北

■企業・団体協力(50音順、敬称略) 富士ゼロックス宮城(株)(カラーコピー機を社会貢献価格にて)

ご寄附ありがとうございます

■東日本大震災救済・復興支援活動のための寄付総額(2013年11月末)

プロペラ募金へのご寄付(当センターが行う復興支援活動を応援する寄付)……………238件 24,208,556円

みやぎNPO夢ファンド 2013年度最終報告会

みやぎNPOファンド10年間の総括報告会です。
ぜひご参加ください。

日 時:2014年3月8日(土)13時半～17時半予定

場 所:みやぎNPOプラザ 交流サロン

<第1部>2013年度夢ファンド助成団体報告

<第2部>みやぎNPO夢ファンド10年の総括

・10年の取り組みと成果報告 ・過去の助成団体の成長発表

発表団体:キャップネットみやぎ

仙台夜まわりグループ

ワールドオープンハート

・パネルディスカッション

<市民活動を支えるものとその役割>

東北復興 ソーシャルビジネスメッセ

社会の課題を解決したり、地域を元気にするために実践される事業、「ソーシャルビジネス」による復興の様子を全国に発信します。

開催日:2014年3月15日(土)11:00-17:00

場 所:エル・パーク仙台

(仙台三越定禅寺通り館5～6階)ほか

このイベントでは、SB事業者に対し、事業や商品・サービスのPRや、連携先や取引先を見つけるための機会を提供する展示会(100ブース)を開催します。
・同時に、物販可能な『復興物産市』、多様なゲスト、挑戦者による『ステージプログラム』も同時開催します。

連絡先

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎ NPO センター

〒980-0804 仙台市青葉区大町 2-6-27 岡元ビル 7F

TEL : 022-264-1281 FAX : 022-264-1209

E-mail : minmin@minmin.org HP : <http://www.minmin.org/>

発行:(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

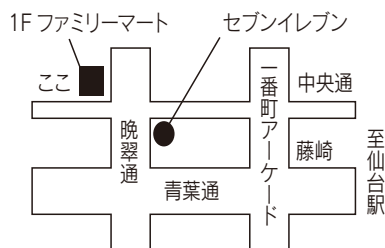
代表理事 大滝精一

紅邑晶子

編集部:伊藤浩子 高尾詩乃

発行日:2014年3月1日

デザイン:氏家朗



岡元ビル 7F 仙台駅から徒歩 20～25 分

編 | 集 | 後 | 記 |

2月はイベント参加、視察で県外のNPOや企業へお邪魔する機会が多かった。企業はもちろん企業理念がしっかり掲げられており、それに基づいた事業と社員への伝達がされている。あるNPOの代表の方は、団体の活動は対象となる人へ受益者の笑顔と幸せな時間を作ることが一番であり、その理念をスタッフが理解していることが大切なのだと話された。団体の理念、マインドを組織の中で常に伝え続けることの大切さを再認識した旅となった。

(伊藤浩子)

2012年11月号より8号にわたって「ニュースレターみんな」を担当をしてきました。今号を持って、担当を卒業し、新しいスタッフに引き継ぎます。個人的には、ライブラリーのコーナー立ち上げなど、初めての挑戦ばかりで、非常に学ぶことが多い活動でした。次号以降も是非ご期待ください。

(高尾詩乃)